

# 小さな花を取り巻くダイナミックな世界

## 花の育種と流通におけるグローバルな展開

志水啓一 (シンジェンタ ジャパン株式会社 L&G 事業本部フラワー事業部)  
清水裕 (シンジェンタ ジャパン株式会社 L&G 事業本部フラワー事業部)

スイスに本社を置き世界 90 カ国に拠点を持つ、作物と花の育種及び種子と農業を扱うグローバル企業であるシンジェンタ。その中で花の育種や流通に携わる 2 名に、世界で花がどのように作られ流通されていくかを聞いた。

志水氏プロフィール：  
しみず・けいいち 広告代理店、飲料メーカーを経て、現職。花卉の流通のマネジメントに携わる。  
清水氏プロフィール：  
しみず・ゆう 青年海外協力隊等を経て、現職。花卉の生産のマネジメントに携わる。



シンジェンタのシバザクラが広がる東京ドイツ村

— 御社がどのような会社であるか教えていただけますか。

**志水：**スイスに本社を置く、作物と花の育種及び種子と農業を扱うアグリビジネスのグローバル企業です。私たちはその中で花を扱う事業部門に所属しています。花のビジネスは 150 年の歴史があります。

— やはり仕事の上でもスイスとのつながりが大きいのでしょうか。

**清水：**花の部門においては、メインの拠点はスイスではなくオランダです。育種にあたっては主にオランダとアメリカで行っています。

— 育種はどのように行うものなのでしょうか。

**清水：**ブリーダーと呼ばれる人が、一つの花を作るにあたって何万通りもの花を交配させています。そのうちのほんのいくつかの交配で期待した結果を得られます。一つの品種をつくるのに 10 年かかることもあります。また、彼らは研究者でありつつ、色に対する繊細な感覚等がアーティスト的です。

— 興味深いです。サイエンスとアート、一見全く異なる 2 つの技術を駆使しているんですね。それにしても、10 年をかけて交配させるというのは、非常に地道なプロセスに思えます。

**志水：**そうですね。長いスパンで考えることに対して理解を得るのは、難しいところもあります。短期的なリターンを求められることもあります。ちなみに売上は年間約 1 兆 4000 億円ほどなのですが、そのうちの 10 分の 1 を研究開発に投資しています。

— 投資額の割合がとても大きいことに驚きます。マーケットがグローバルであるだけに、世界で活躍するにあたりどのように考えているのでしょうか。

**志水：**マーケットを投資対象として見るところはあります。これからは中国やインドでビジネスを展開できるのではと思います。シンジェンタは中国にも拠点を持っています。

また、花の種子のビジネスは比較的利益率が高く、広告宣伝費もあまりかからないビジネスですが、その分を開発に再投資しなければなりません。そのサイクルを作っていかなければならない業界です。

—— 研究に携わる方々はどのようなバックボーンの方が多いのですか。

**清水：**生物学や農業分野の博士号を持っている人が多いです。UC Davis というカリフォルニアにある大学や、オランダのワゲニンゲン大学を出た社員が多いと思います。

—— 多くの国から携わる方が輩出されているようですが、国によって花や育種に対するスタンスは異なるものでしょうか。

**清水：**イギリスは、植物そのものに対する造詣がとて深いと思います。一方でオランダは、植物を大量に生産し、ビジネスとして成立させることに長けています。オランダは九州くらいの面積の国ですが、ヨーロッパでトップクラスの花の輸出国です。卸売市場は1つのみですが、集約されていて流通がシステマティックに管理されています。花を積んだトラックにGPSが付いていて、どこを走っていて温度がどれくらいかをモニタリングしています。

日本は、一つの花を作る職人的な面が優れていますが、一つの種類を大量に安く供給するということはオランダの方が先行していると思います。流通についても課題があると思います。

—— それはどんな課題でしょうか。

**志水：**寡占化しているところです。それによって、大きな小売企業に合わせた生産体制にシフトしていています。また、今は5年以上前の倍くらいに輸送コストがかかっているところも大きな障壁になっています。

—— 日本での花の生産地はどんなところが挙げられますか。

**清水：**全国にあります。関東近郊ですと埼玉県の鴻巣が大きな生産地の一つです。200軒程の生産者がいて、私たちの開発した花を委託して作ってもらっています。なぜ鴻巣で盛んなのかは分かりませんが、畑作や稲作で経営が成り立つような大きな土地のない場所で高収入を上げようとすると、花卉生産が選択肢に挙げられるようです。先見のある人がこの地域にいたのかもしれない。

—— もっと都心に近い土地で盛んになるものかと思っていました。それにしても、研究開発の規模が大きく、開発された種子が世界中に運ばれていくという、小さな花からは想像がつかないダイナミックな動きがあるんですね。

**志水：**花の種は、種類によっては同じ重さで金より高いものもあるんです。例えばペゴニアの種はとて小さく、一年分の世界中の流通量が掌に収まるくらいです。つまり軽くて運びやすく高付加価値であるということ。オランダで最初に花のビジネスを始めた人たちが、そのことに気づいたのだと思います。

—— なかなか気づけないことですね。ランドスケープの世界でも、花のことをもっとよく知り、取入れられたらと思います。今日はありがとうございました。



開発された花を育てるシードセンターの様子